

汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

学習観転換科目開発チーム

兵庫教育大学教員養成フラッグシップ大学コンソーシアム報告会

2024/02/29



先端教職課程カリキュラム開発センター

- 学習観転換科目開発チーム

山中一英 宇野宏幸 石野秀明 山内敏男 宮田佳緒里
松田 充 清水優菜

■ 学習観転換科目

□ 「学習科学と授業のリデザイン」 （標準履修年次：2；単位数：2）

- ・ 人が潜在的に持っている学びの力を引き出す環境をデザインするという学習科学の視点に立ち，他者と考えながら学ぶ授業づくり，そこでの教員の役割や評価等について学ぶ

□ 「ラーニング・ファシリテーションの理論と実践」 （標準履修年次：2；単位数：1）

- ・ 学習者中心の授業で求められるファシリテーターとしての教員の役割やファシリテーションに関する理論を学び，既存授業のリデザイン，グループワークやワークショップの実践等を通して，ラーニング・ファシリテーションについての理解を深めていく

■ 学習観転換科目

□ 「学習科学と授業のリデザイン」

授 業 計 画	第10回 第11回	演習（オンラインか対面） 教員一人ひとりの学習観・学習者観の転換にかかる経験が日常の実践とともに事例として収集・整理された汎用的学習材「事例集」を活用した学びを行う。ここで想定されているのは、次のような学びのプロセスである。グループにおいて他者と対話するなかで、事例に纏わる他者の経験を「聴く」、事例に纏わる自らの経験を「語る」「掘り下げる」、自らの経験を他者の経験と「比べる」、学術理論等と「突き合わせる」。そして、自らが自明的に前提していた観に「気づく」。
---------	--------------	--

■ 汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

□ 基本的な考え方とねらい

- 学習観の転換は容易には生じない。一般に「観」は、人間の「認識の前提」に位置する心的概念だからである。自らがどのような「観」を有しているかさえ気づかないことも少なくない
- 「観」の転換をいかに図るか。具体的な実践事例を起点にするというのが、学習観転換科目開発チームのスタンスである



- 事例は、実際の出来事が言語化されたもの。教職経験のない学生にとって、抽象度の高い理論よりも、現実感や当事者意識をもちやすいにちがいない
- 事例のなかに相反するものが含まれることがある。これが学生により深い思考をもたらす
- 矛盾や齟齬を起点に思考を重ねていく過程で、暗黙に保持する自らの前提や枠組みを認識し、新たな発想を生んでいく可能性が想定される

■ 汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

□ 基本的な考え方とねらい（つづき）

- 事例集の学習材としての位置づけは、法学部の学生が裁判の前例を判例として学ぶのと同じ仕組み
- 裁判経験のない学生にとっての判例，教職経験のない学生にとっての「事例集」と位置付ける
- 法曹となっても判例から学び続けるように，教職に就いても「事例集」との対話を通して学び続ける学習材となるように，教職課程の学生にとって，そして教員になっても拠り所の一つとなるものにしたい

■ 汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

□ 理論的基盤

- Schön (1983) では、“knowing”と”knowledge” が区別され、前者は、「行為の中の省察」の過程の基盤にある「行為の中の知 (knowing in action)」の概念に関連して、実際の行為のなかで自動的に暗黙的に作動する場面固有の動態的なものであり、この点において静態的な後者とは区別される (e.g., 山中, 2018)
- “knowing” (ポランニー (Polanyi, M) の「知の暗黙の次元」「暗黙の認識」に相当すると考えられる) にいかに接近するか。石井 (2009) は、ポランニーが強調した「対象に内在する＝棲み込む」という方法に言及する。眼前にある手がかりあるいは対象に棲み込むという契機を経て、そこからその背後にある「意味ある全体」を見通すことができるというものである
 - － 「その人の立場に立って、その人の気持ちになりきることである。その人の視線で、周囲の状況を見回してみる。その人の気持ちをわかろうとする。その人が何に苦勞し、何に楽しさをおぼえているのか理解できる」 (石井, 2009)

■ 汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

□ 「事例集」作成のためのデータ収集：質問紙調査（山中・石野・清水・宇野・山内・宮田・松田, 2024）

- 学習観の転換と親和する概念に「変容的学習」（Mezirow, 1999 金澤・三輪監訳 2012）がある
 - 「変容的学習」とは、経験の意味を解釈する枠組みの総体である「意味パースペクティブ」を捉え直す行為と定義される（三輪, 2012）
 - 現職教員の身分を有する兵庫教育大学大学院生を対象に、孫（2014）が作成し、吉村・福島（2020）が因子構造を検討した変容的学習尺度への回答を求めた
 - WEB調査フォーム上にてインフォームド・コンセントを行い、本調査への協力に同意した76名が本研究の分析対象となる
- * 本研究は、文部科学省：令和4年度教師の養成・採用・研修の一体的改革推進事業「多機関連携・協働とアジャイル型手法による学習観転換科目及び教師の連携・協働科目の開発と改善」として実施されたものである

■ 汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

□ 「事例集」作成のためのデータ収集：質問紙調査（山中・石野・清水・宇野・山内・宮田・松田, 2024）（つづき）

- ・ 変容的学習を構成する 3 つの下位概念（孫, 2014; 吉村・福島, 2020）
 - I パースペクティブの変容
 - ・ それまでとは異なる視点を獲得したことがあった
 - ・ 自分のものの見方が大きく変わったと覚るこゝがぁあった
 - ・ それまで理解できなかった新しい価値観を覚るこゝがぁあった
 - II 混乱的ジレンマ
 - ・ 自分の考えと違ふ意見に接し、葛藤を覚るこゝがぁあった
 - ・ 自分と異なる考え方に対して、納得できないと覚るこゝがぁあった
 - ・ 様々な人の考えや価値観にふれて、モヤモヤしたこゝがぁあった
 - III 自己省察
 - ・ 自分の中に思い込みや決めつけがあると覚るこゝがぁあった
 - ・ 自分の考え方が偏っていると覚るこゝがぁあった

■ 汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

□ 「事例集」作成のためのデータ収集：質問紙調査（山中・石野・清水・宇野・山内・宮田・松田, 2024）（つづき）

- ・ 質問紙調査の結果，現職教員を3つの下位概念の組み合わせに基づく次の3つの類型に分類できることが示された
 - ① パースペクティブの変容低認識群
自己省察と混乱的ジレンマの程度は高かったものの，パースペクティブの変容までは相対的に至っていないと認識している
 - ② 混乱的ジレンマ低認識群
混乱的ジレンマの程度は低いものの，パースペクティブの変容に至ったと相対的に認識している
 - ③ 変容的学習認識群
変容的学習が生じたと相対的に認識している

■ 汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

□ 「事例集」作成のためのデータ収集：インタビュー調査

- ・ 質問紙調査において顕著な回答をした8名を対象者として選定し、得られた回答について詳細に聴き取るインタビュー調査をオンラインにて実施。
1人あたり約1時間を要した
- ・ 調査に先立ち、「インタビュー調査への協力とデータの利用に関する同意書」の提出を願い、インタビューへの協力と、インタビューでの回答内容等が研究成果や汎用的な学習材・教材として公表・活用されることの同意を得た
- * 本研究は、文部科学省：令和4年度教師の養成・採用・研修の一体的改革推進事業「多機関連携・協働とアジャイル型手法による学習観転換科目及び教師の連携・協働科目の開発と改善」として実施されたものである

■ 汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

□ 「事例集」作成のためのデータ収集：インタビュー調査（つづき）

- ・ 調査対象者の変容的学習の類型は次のとおり

教員 A：変容的学習認識群（⇒「事例集」への作り込みを例示する）

教員 B：混乱的ジレンマ低認識群

教員 C：パースペクティブの変容低認識群

教員 D：パースペクティブの変容低認識群

教員 E：変容的学習認識群

教員 F：混乱的ジレンマ低認識群

教員 G：パースペクティブの変容低認識群

教員 H：混乱的ジレンマ低認識群

■ 汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

□ 事例から「事例集」への作り込み

- 「ケース教材の主眼は、授業に参加する学生に読んで考えてもらうことであり、そのために必要なデータをケースの中にコンパクトに入れこむことが重要である。基本的には事実をベースに記述していくが、思考を促すためにときには偽情報を入れたり、必要な情報をあえて隠すこともある」
(徳山, 2015, p.163)
- ・ 「ケースメソッドにおけるケースとは、読み手が考え、分析する際の必要最低限の材料となるデータを網羅していることが必要条件であり、さらに興味がもてるストーリーとして書くことができれば十分条件を満たしているといえる」 (徳山, 2015, p.164)



- ・ 「ケースとは事実の羅列ではなく、ケース作成者が作った1つのストーリーである」 (徳山, 2015, p.166)

■ 汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

□ 授業実践のデザイン

- ・ 次に示すような〈Guiding Questions〉を手がかりに授業を展開していく

〈Guiding Questions〉

- ① 学びについての教員の考え方（学習観）がどのように変化しているか
- ② 学習者としての子どもに対する教員の考え方（学習者観）がどのように変化しているか
- ③ 学びについて、学習者としての子どもについて、教員の考え方の変化を促した要素やポイントとなった経験は何だろうか
- ④ その変化の過程で、教員にはどのような困難や葛藤があったと考えられるだろうか。そして、教員はそれにどのように向き合ったのだろうか
- ⑤ （受講者側から）事例を読んで疑問に思ったことは何か

■ 汎用的学習材「事例集」を用いた学びの可能性

□ 〈Guiding Questions〉の構成

- 〈Guiding Questions〉は、検討対象となる事例内容によって異なり、事例にふさわしいQuestionsを構成する必要がある
- それでも①～⑤は、多くの事例に汎用するQuestionsといえるのではないか
- ①～⑤のQuestionsのなかで、どのQuestionに重心を置くかは、事例ごとに異なる

文献

- 石井淳蔵 (2009). ビジネス・インサイト—創造の知とは何か 岩波書店
- Mezirow, J. (1991). Transformative dimensions of adult learning. Jossey-Bass. (メジロー, J. 金澤 睦・三輪健二 (監訳) (2012). おとなの学びと変容—変容的学習とは何か 鳳書房)
- 三輪健二 (2012). 解説—メジロー『おとなの学びと変容』をめぐって メジロー, J. 金澤 睦・三輪健二 (監訳) (2012). おとなの学びと変容—変容的学習とは何か (pp.317-332) 鳳書房
- Schön, D.A. (1983). The reflective practitioner: How professionals think in action. Basic Books.
- 孫 大輔 (2014). 医療系専門職と市民・患者のカフェ型ヘルスコミュニケーションによる変容的学習のプロセス 聖路加看護大学大学院看護学研究科学位論文
- 徳山美津恵 (2015). ケースメソッドの進め方1 ケース教材の作成 (pp.161-171) 佐藤善信 (監修) 高橋広行・徳山美津恵・吉田満梨 (著) ケースで学びケーススタディ 同文舘出版
- 山中一英 (2018). 学校教育の社会心理学論点とその展開可能性—「対話的な学び」と「教師教育」に焦点をあてた考察の試み— 教育心理学年報, 57, 61-78.
- 山中一英・石野秀明・清水優菜・宇野宏幸・山内敏男・宮田佳緒里・松田 充 (2024). 教師の学習観の転換に関する基礎的研究—変容的学習の視点からの検討— 兵庫教育大学研究紀要, 64, 77-89.
- 吉村春美・福島創太 (2020). 学び続ける教師に求められる学習に関する実証研究—変容的学習の視点から— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 60, 71-81.